

特攻艇イメージ画パネル制作について

與那覇 史香（宮古島市総合博物館学芸係）

はじめに

宮古島市総合博物館では、平和展「特攻艇と宮古～知られざる特攻作戦～」*₁にあわせて、令和2年度の委託業務にて特攻艇イメージ画パネル（以下、特攻艇パネル）を2点制作した。

太平洋戦争末期の1944（昭和19）年、戦況の悪化に伴い、日本軍は劣勢を挽回すべく最後の手段としてとったのが特攻作戦であり、その作戦の一つに「特攻艇」による攻撃があった。特攻艇とは、爆薬や爆雷を搭載し、暗闇に乗り敵の船に体当たり攻撃を行うベニヤ板製の簡易な造りのボートのことである。その戦法ゆえに、特攻艇の部隊は極秘部隊であった。そして、この特攻艇部隊が宮古にも配備されていた。

本稿では、特攻作戦に至る経緯や特攻艇の概要、宮古に配備された特攻艇部隊についてまとめるとともに、特攻艇パネル制作にあたっての設定内容や調査結果を報告する。

1. 太平洋戦争と特攻作戦

1) 特攻作戦に至る経緯

1941（昭和16）年12月8日、日本軍はハワイの真珠湾とマレー半島を奇襲攻撃し、アメリカを主とする連合国との戦争が始まった。開戦当初、日本軍は戦略的な攻勢をとり、東南アジアの広大な地域を短期間のうちに支配下におさめ、オーストラリア北側の海まで進出した。しかし、その後は連合国の反撃が始まる。

1942（昭和17）年6月のミッドウェー海戦に勝利した米軍は、同年8月にはガダルカナル島への上陸を開始。以後、同島の争奪をめぐって激しい攻防戦が展開されるが、翌43（昭和18）

年2月、日本軍は戦いに敗れ、ガダルカナル島から撤退する。この激しい攻防戦で日本軍は、多数の航空機と熟練した搭乗員、多くの艦船を失い、さらには日本の経済も深刻なダメージを受けた。その後も、敗戦につぐ敗戦により日本軍にとって不利な戦況となっていく。

1944（昭和19）年6月15日、日本軍の南方の防衛線であったマリアナ諸島サイパン島に米軍が上陸した。激しい戦闘の末、兵力と火力に優る米軍を相手に追い込まれた日本軍は、同年7月7日の万歳突撃*₂を最後に組織的抵抗を終えた。サイパン島を含むマリアナ諸島を手中におさめた米軍は、サイパン島に航空基地を整備する。これにより、関東や中部など日本の工業中枢部がB-29爆撃機の航続距離の爆撃圏内に入り、同年11月以降、これらの地域の大規模な戦略爆撃が開始され、日本の工業生産力は急激に低下した。

圧倒的な米軍の兵力、兵器および物資生産能力の差を見せつけられた日本軍は、この劣勢を挽回するための最後の手段として、組織的な特攻作戦を開始した。

2) 特攻作戦とは

「特攻」とは、特別攻撃の略で、その内容は爆弾をのせた飛行機やボートなどに隊員が乗ったまま、敵の船に体当たりして沈没させようという組織的な作戦である。「必死」の攻撃であり文字通り乗組員は必ず死ぬことを意味する。

戦況が悪化し、熟練したパイロットや飛行機を多く失っていたこと、新たなパイロットの養成や飛行機の生産が追いつかなかったことなど

の理由も重なり、少ない人数で大きな船を沈める可能性のあった特攻作戦がとられた。

2. 日本陸海軍が開発した特攻艇とその部隊

特攻艇とは、太平洋戦争末期に日本海軍と陸軍が開発した海上兵器で、爆薬や爆雷を搭載し敵の船に体当たりをして攻撃を行うベニヤ板製の簡易な造りのボートである。海軍が開発したものが「震洋艇」、陸軍が開発したものが「四式肉薄攻撃艇（秘匿呼称：連絡艇（マルレ））」（以下、マルレ艇）である。

1) 震洋艇の開発

1944（昭和19）年4月、軍令部総長は海軍大臣に対し「^{まるいち}㊦から^{まるきゅう}㊩」までの9項目からなる特殊兵器の実験製造を提案する。そして、艦政本部で慎重な検討の結果、^{まるよん}㊨の船外機付衝撃艇（「^{まるご}㊧金物」のち震洋艇）と^{まるろく}㊬の人間魚雷（「^{まるご}㊧金物」のち回天）が共に採用され、直ちに試作、設計が始まり、同年1944（昭和19）年5月27日に試作艇の試運転が成功して量産が決定した。

(1) 震洋艇の種類と構造

一型震洋艇			
（『特別攻撃隊全史』より）			
全長	5.1m	幅	1.67m
高さ	0.8m	普通吃水	0.326m
満載吃水	0.55m	排水量	1.295 t
主機関	トヨタ特KC型、 ガソリンエンジン1基		

兵装	爆装 250kg、12cm ロサ弾×2 発
乗員	1名
速力（特別全力）	16kt（23kt）
馬力（特別馬力）	42H. P.（67H. P.）
全力航続距離	16kt で 110 海里（約 204km）

五型震洋艇			
（『特別攻撃隊全史』より）			
全長	6.5m	幅	1.86m
高さ	0.9m	普通吃水	0.380m
満載吃水	0.60m	排水量	2.2 t
主機関	トヨタ特KC型、 ガソリンエンジン2基		
兵装	爆装 250kg、12cm ロサ弾×2 発 13mm 機銃×1 丁		
乗員	2名		
速力（特別全力）	27kt（32kt）		
馬力（特別馬力）	84H. P.（134H. P.）		
全力航続距離	27kt で 170 海里（約 315km）		

(2) 震洋特別攻撃隊の編成

海軍では、1944（昭和19）年9月から終戦直前の1945（昭和20）年8月まで、合計113の震洋特別攻撃隊（震洋隊）が編成された。これらの部隊は、米軍の上陸予想地域の沖縄をはじめ、本土決戦に備えて南九州や沿岸地域、さらには国内のみならず中国、台湾、フィリピン、イン

ドネシアにも配備された。

一部隊 170～200 人の隊員で構成されており、一型震洋艇の部隊の場合 55 隻（うち 5 隻予備）、五型震洋艇の部隊の場合 24 隻（予備若干あり）の震洋艇を保有している。

2) マルレ艇の開発

陸軍では、1944（昭和 19）年 4 月、造りが簡単で軽量の攻撃艇をあらかじめ敵の上陸予想地に配置し、奇襲によって攻撃をかけるという着想から肉薄攻撃艇の開発が始まった。同年 5 月には設計を開始し、7 月 11 日には試作艇甲一号型が採用され、7 月下旬に正式な戦法として採用された。8 月には大阪、横浜などの各地で量産が開始された。

(1) マルレ艇の構造

マルレ艇			
250 爆雷保持金具			
(『特別攻撃隊全史』より)			
全長	5.6m	幅	1.8m
深さ	0.73m	重さ	0.975 t
吃水	0.26m	排水量	1.45 t
発動機	日産特KC型、 ガソリンエンジン 2 基		
兵装	爆装 250kg、12cm ロサ弾 × 2 発		
乗員	1 名		
速力 (特別全力)	16kt (23kt)		

馬力 (特別馬力)	42H. P. (67H. P.)
全力航続距離	16kt で 110 海里 (約 204km)

(2) 海上挺進戦隊、海上挺進基地大隊の編成
陸軍では、1944（昭和 19）年 9 月から 10 月にかけて海上挺進部隊が編成された。海上挺進部隊は、マルレ艇に乗船し直接攻撃を行う海上挺進戦隊と、基地の構築や船艇の整備等の支援業務を担う海上挺進基地大隊の 2 つに分かれる。それぞれ 30 部隊が編成され、部隊番号が同一の海上挺進戦隊と海上挺進基地大隊がセットになって配備された。

海上挺進戦隊は、一部隊 104 人の隊員で構成されており、100 隻のマルレ艇を保有する。海上挺進基地大隊は一部隊約 900 人の隊員で構成されていた。

3. 宮古に配備された特攻艇部隊

宮古に配備された特攻艇部隊は、海軍の第 41 震洋隊と、陸軍の海上挺進第 4 戦隊、同第 4 基地大隊、同第 30 基地大隊である。海上挺進第 30 戦隊も配備予定であったが、輸送中に奄美諸島沖で米軍の攻撃をうけ輸送船が沈没したため、宮古島への配備は不能となった。

また、これらの部隊が構築した特攻艇の秘匿壕が現在でも各地に残されている。特攻艇による攻撃は、敵に知られることが許されない極秘任務だった。そのため、特攻艇を隠すための秘匿壕が必要で、米軍の上陸が予想される海岸沿いに特攻艇秘匿壕が造られた。しかし、宮古への米軍の上陸がなかったことから、これらの部隊は出撃すること無く終戦を迎えている。

現在、宮古地区で確認されている特攻艇秘匿壕は次の 5 ヲ所である。

1) ヌーザランミ特攻艇秘匿壕

本秘匿壕は、宮古島北部の狩俣地区に位置し（図1①）、第41震洋隊が配備された壕である。1945（昭和20）年1月28日より海軍313設営隊第2中隊第1小隊第1及び第2分隊によって構築がはじまり、第41震洋隊、狩俣・島尻地区の勤皇隊隊員が動員されて同年4月末には完成した。

2) 荷川取海岸秘匿壕群・ウブドゥマーリヤ特攻艇秘匿壕群

本壕群は、平良字荷川取の荷川取漁港近辺に位置し（図1②）、海上挺進第4戦隊及び第4基地大隊が配備された壕である。1944（昭和19）年9月7日に宮古島に配備された海上挺進第4基地大隊によって構築がはじまり、完成の詳細時期は不明であるが、海上挺進第4戦隊と合流する1945（昭和20）年1月末頃までには完成したと思われる。

3) トゥリバー浜特攻艇秘匿壕群

本壕群は、平良字久貝のピナガマ海空すこやか公園西側のトゥリバー浜に位置し（図1③）、1944（昭和19）年11月に宮古島に配備された海上挺進第30基地大隊によって構築された壕である。

4) 大浜の特攻艇秘匿壕群

本壕群は、平良字久貝の伊良部大橋のたもと（平良側）に位置し（図1④）、1944（昭和19）年11月に宮古島に配備された海上挺進第30基地大隊によって構築された壕である。

5) カンギダツ壕・カヤッフア壕

本壕は、下地島の南西部の岩礁地帯に位置し（図1⑤）、地元で「カンギダツ」と呼ばれる岬と「カヤッフア」と呼ばれる湾の断崖部に計12

基の海蝕洞が確認されている。

戦時中、伊良部島には独立混成第59旅団（碧部隊）が駐屯しており、米軍の上陸地点が下地島と伊良部島南岸周辺に想定され、それに伴い、下地島の島外地点に水上特攻艇を秘匿したとの聞き取りが得られている（宮古郷土史研究会1995）。しかし、本壕には人為的な痕跡が確認できないこと、そして付随する部隊の確認が得られていない点から、秘匿壕としての確証は未だ得られていない。

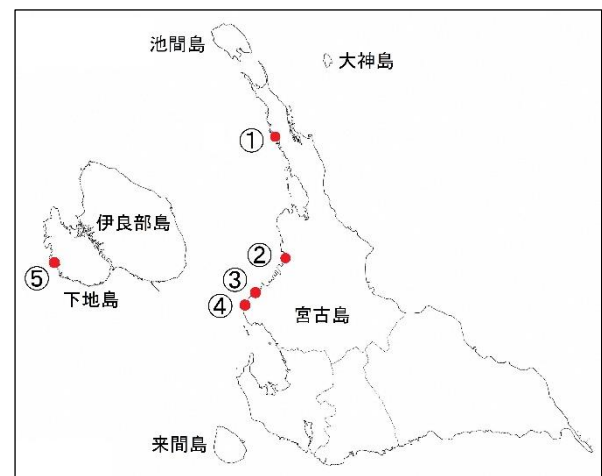


図1 特攻艇秘匿壕分布図

- ①ヌーザランミ特攻艇秘匿壕
- ②荷川取海岸秘匿壕群・ウブドゥマーリヤ特攻艇秘匿壕群
- ③トゥリバー浜特攻艇秘匿壕群
- ④大浜の特攻艇秘匿壕群
- ⑤カンギダツ壕・カヤッフア壕

4. 特攻艇イメージ画パネルの制作

当館では、令和2年度の委託業務にて特攻艇イメージ画パネル（以下、特攻艇パネル）を2点制作した。1点は、「砂浜に残された震洋艇」（写真1）、もう1点は「壕から海を望む震洋艇」（写真8）のテーマで、石嶺直次氏と伊良部映里氏に特攻艇パネルを制作していただいた。

本章では、特攻艇パネルの制作目的をはじめ、制作に使用した画材や規格等をまとめる。



写真1 特攻艇パネル「砂浜に残された震洋艇」

1) 特攻艇パネル制作の目的

特攻艇パネルは、実寸大に近いサイズの特攻艇と周辺環境を絵で表現することで、平和展「特攻艇と宮古～知られざる特攻作戦～」の観覧者に対し、特攻艇や当時の状況を視覚的に伝えることを目的として制作した。

2) 特攻艇パネルの画材と大きさ

(1) 画材

特攻艇パネルは、縦 1,820mm、横 910mm のアルミ複合板を計6枚使用しており、同板に下地材を塗布し、水性塗料やエアブラシを用いて絵を描いた。アルミ複合板を使用した理由としては、軽くて加工がしやすい点と、保管の際に分割することができるという点から選定した。

(2) 大きさ

特攻艇パネルの大きさは次のとおりである。

「砂浜に残された震洋艇」には、先述のアルミ複合板を4枚使用しており、縦が 1,820mm、幅が 3,640mm である。

「壕から海を望む震洋艇」には、先述のアルミ複合板を2枚使用しており、縦横ともに

1,820mm である。

5. 特攻艇パネルの設定内容と参考にした写真や文献等

特攻艇パネルは、宮古島北部の狩俣地区に位置するヌーザランミ特攻艇秘匿壕とそこに配備された第41震洋隊をモデルに制作した。

本章では、それぞれのパネルを制作するにあたっての設定内容や、制作時に参考にした写真や文献、調査結果をまとめる。

1) 「砂浜に残された震洋艇」

(1) 設定場所



写真2 八光湾遠景

(○部分がヌーザランミ特攻艇秘匿壕)

本パネルの砂浜は、第41震洋隊の出撃予定地であった八光湾(写真2)を描いている。背景の植物は、現在八光湾に生えているモンパノキやアダン、グンバイヒルガオを描いた。

(2) 設定時期

設定時期は、終戦直後とし、砂浜に照りつける日差しの中、出撃することなく役目を終え八光湾におろされた震洋艇をイメージして描いた。

(3) 震洋艇の型について

震洋艇の型は、一型と五型の2種類あるが、第41震洋隊は「一型五五隻」(震洋会編1990)*₃を保有していたとのことから一型を描いた。

また、震洋艇一型の船体を描く際、沖縄県公文書館所蔵(以下、公文書館)の震洋艇の写真(写真3)*₄や『【写真集】人間兵器 震洋特別攻撃隊』(震洋会編1990)に掲載されている震洋艇の写真の他、鹿児島県の知覧特攻平和会館に展示されている五型震洋艇の実寸大復元模型(写真4)や、金武町立中央公民館に展示されている一型震洋艇の実寸大復元模型(写真5)を熟覧し参考にした。

(4) 震洋艇のレールと台車について

第41震洋隊は、「線路を引き台車の上に震洋を載せ常時出動する態勢にあった」(岡本2000)ことから、震洋艇の下に線路(レール)と台車を描いた。

レールを描くにあたって問題となったのが、レールが枕木の上に設置されていたのか、または、敷石でレールを固定したのかである。宮古島に配備されていた他部隊をみると、海上挺進第4戦隊の場合、枕木の上にレールを設置していた(岡本2004)。一方、海上挺進第30基地大隊が構築した大浜の特攻艇秘匿壕群にはレールを設置する際の敷石が残されている(写真6)。また、聞き取りの中で、10年以上前、ヌーザランミ特攻艇秘匿壕付近で大浜の特攻艇秘



写真3 震洋艇(沖縄県公文書館所蔵)



写真4 五型震洋艇の実寸大復元模型(知覧特攻平和会館所蔵)



写真5 一型震洋艇の実寸大復元模型(金武町立中央公民館所蔵)

匿壕群の敷石のようなものを見たことがあるとの情報が得られた。これがレールに関連するものかは不明であるが、今回のパネルでは敷石でレールを固定する方式で描いた。レールの固定

方法については、今後の課題であり、聞き取り調査及び文献調査を進めていきたい。

次に、台車については、公文書館所蔵の震洋艇と台車の写真(写真7)を参考にした。

震洋艇の運搬には、トロッコやリヤカーが用いられていた。トロッコが写真7、リヤカーが写真3や写真10と思われる。第41震洋隊については、1945(昭和20)年3月1日に漲水港からヌーザランミ特攻艇秘匿壕まで震洋艇が搬入される様子について「艇隊員が震洋艇を大型三輪車に乗せ、手押しで運んでいる」(大下、高橋 2005)とあり、大型三輪車というのはリヤカーのことと思われる。しかし、当該壕には、レールが敷かれていることから、出撃の際はリヤカーではなく、トロッコに震洋艇を載せていたと想定し、台車にはトロッコを描いた。



写真6 大浜の特攻艇秘匿壕群の敷石



写真7 震洋艇(沖縄県公文書館所蔵)

2) 「壕から海を望む震洋艇」(写真8)



写真8 特攻艇パネル「壕から海を望む震洋艇」

(1) 設定場所

本パネルの壕は、第41震洋隊が配備されたヌーザランミ特攻艇秘匿壕(写真9)である。背景には、出撃の際に通る、秘匿壕から海岸まで続く誘導路とその先に見える伊良部島を描いた。



写真9 ヌーザランミ特攻艇秘匿壕の壕口

(2) 設定時期

設定時期は、終戦後の夕暮れ時とし、出撃することなく役目を終え、壕内に残された震洋艇と、そこに優しく差し込む夕日の光を描いた。

(3) 誘導路について

本壕は、現在、壕口が6箇所確認されており内部で全て繋がっている。しかし当時は、震洋

艇を海まで運ぶための誘導路が、全ての壕口を繋いでいた(図2)。誘導路には、震洋艇を海まで運ぶためのレールが敷かれ、いつでも出撃できるよう震洋艇を積んだ台車が常備されていたという。また、「通路は掩体壕*5で囲まれていた」(震洋会編1990)、「壕口から20m程度一直線上の塹道が残っており、天井は草木等で偽装していた」(沖縄県立埋蔵文化財センター2005)ということから、誘導路は掘り込み式で描いた。場所によっては、盛り土の掩体も考えられるが、残念ながら当該壕前の公園整備等によって当時の地形は窺えない。

また、誘導路は「上空からは判別できないように奉公隊にはアダンバ、雑草を伐採してもらい、偽装作業の協力をしてもらった」(大下、高橋2005)とのことであるが、本パネルは終戦後の情景ということで、これらの偽装を取り除いた様子を描いている。

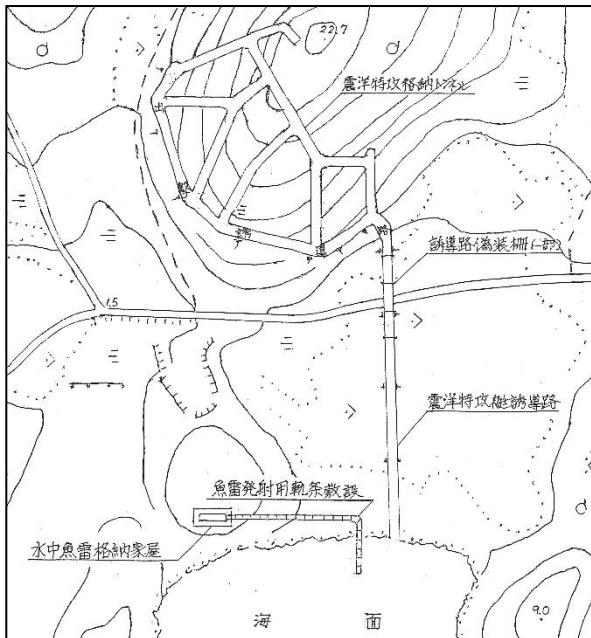


図2 震洋特攻艇格納トンネル外の施設位置図(大下、高橋2005より)

(4) 秘匿壕の内部について

当該秘匿壕内部は、「壁や天井は現在のよう

に岩盤が剥き出しの状態ではなく、木組みがなされていた」(沖縄県立埋蔵文化財センター2005)とのことから、壁及び天井に木枠や柱を描いた。その際、公文書館所蔵の震洋艇と秘匿壕の写真(写真10)を参考にした。



写真10 震洋艇(沖縄県公文書館所蔵)

おわりに

特攻艇パネルの制作にあたり、記録や文献、聞き取り調査や資料の熟覧などをもとに、ヌーザランミ特攻艇秘匿壕の震洋艇やレール、誘導路や壕内の様子をイメージして制作した。

当初、震洋艇の写真さえあれば絵は描けるだろうと安易に考えていたが、制作者との打合せを重ねるうちに、その考えの甘さを痛感した。震洋艇はもちろんのこと、レールや台車、誘導路や壕内の形や色について、少ない資料から検証しなければならず、当時の状況を絵で再現することの難しさを思い知った。さらに、設定時期や時間をいつにするのかによって、日差しの強さや傾き、植物の開花時期など周辺環境の表現が変わることなど、私が思いもつかないような貴重な意見を得る事ができた。

今後の課題として、レールの固定方法や台車の形はどのようなものだったのか、誘導路脇は海岸まで掘り込まれていたのか否かなど、調査

を進めていく必要がある。

当時のヌーザランミ特攻艇秘匿壕や八光湾周辺の様子を知る方々からの情報がありましたら是非ともご教授願います。

謝辞

特攻艇パネルの制作に際し、石嶺直次さん、伊良部映里さん、宮城敏郎さんには現地調査や資料調査をしていただき、パネルの細部にいたるまで丁寧に表現していただきました。

知覧特攻平和会館の八巻聡さんには、特攻艇に関する調査に際し、資料提供や館内案内をしていただきました。

金武町教育委員会の安座間充さんには、金武町立中央公民館に展示されている震洋艇の実寸大復元模型及び展示パネルの解説をしていただきました。

宮古島市文化財資料室の森谷大介さんには、特攻艇パネル制作に際し貴重なご意見をいただきました。

ここに記して感謝申し上げます。ありがとうございました。

注釈

*1 平和展「特攻艇と宮古～知られざる特攻作戦～」は令和2年度開催予定であったが、新型コロナウイルスの影響を受け2度延期となっており、令和4年度に開催予定である。

*2 万歳突撃とは、太平洋戦争時に日本軍が実行した玉砕前提の突撃戦法。

*3 一型震洋艇の部隊の場合、一部隊で55隻(うち5隻は予備)の震洋艇を保有する。

第41震洋隊が乗船した「豊栄丸」は1945(昭和20)年2月28日に漲水港(現平良港)へ入港し、直ちに陸揚げ作業を開始した。しかし翌日、「豊栄丸」と陸軍の「大建丸」、敷設艇「燕」が米軍の攻撃を受け沈没し、数十人の戦死者が

出た。この攻撃により、秘匿壕に格納された震洋艇の数は、40又は41隻とされている。

*4 沖縄県公文書館のホームページ(<https://www.archives.pref.okinawa.jp/>)の「写真が語る沖縄」のページにて、「特攻艇」のキーワードで検索をかけると1945年にアメリカ軍が撮影した震洋艇やマルレ艇の写真を閲覧することができる。

*5 掩体壕とは、装備や物資、人員などを敵の攻撃から守るための施設である。

参考文献

宇野 常彦

1979 『宮古島駐屯記 平良町』

大下 繁樹、高橋 彰

2005 『南西諸島 紺碧の海に映える攻防の島～宮古島防衛施設～海軍第313設営隊戦記と思い出』

岡本 恵昭

2000 「元震洋特攻八木部隊の概要」『宮古研究 第8号』宮古郷土史研究会

2004 「資料公開・宮古島に於ける戦争資料「霧生籐吉郎関係」「中尾藤雄関係資料」」『宮古研究 第9号』宮古郷土史研究会

沖縄県教育庁文化財課史料編集班編

2012 『沖縄県史 資料編23 沖縄戦日本軍史料 沖縄戦6』沖縄県教育委員会

2017 『沖縄県史 各論編 第6巻 沖縄戦』沖縄県教育委員会

沖縄県立埋蔵文化財センター編

2002 『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第5集 沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(Ⅰ)－南部編－』沖縄県立埋蔵文化財センター

2002 『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第12集 沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(Ⅱ)－中部編－』沖縄県立埋蔵文化

- 財センター
- 2003 『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第16集 沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(Ⅲ)－北部編－』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 2004 『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第25集 沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(Ⅳ)－本島周辺離島及び那覇市編－』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 2005 『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第30集 沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(Ⅴ)－宮古諸島編－』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 2006 『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第41集 沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(Ⅵ)－八重山諸島編－』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 2015 『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第75集 沖縄県の戦争遺跡－平成22年～26年度戦争遺跡詳細確認調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 財特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会
- 2008 『特別攻撃隊全史』財特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会
- 震洋会編
- 1990 『【写真集】人間兵器 震洋特別攻撃隊』荒井志郎監修、株式会社 国書刊行会
- 瀬名波 栄
- 1975 『太平洋戦争記録 先島群島作戦(宮古篇)』先島戦記刊行会
- 『宮古島戦記』宮古島戦記刊行会
- 中尾 藤雄
- 1998 「元陸軍海上挺進隊『中尾メモ』全文紹介－①特攻艇員の日記より－」『平良市総合博物館紀要第5号』平良市総合博物館
- 野口 退蔵
- 1972 『宮古島建築兵始末記』防衛庁防衛研修所戦史室
- 1968 『戦史叢書 沖縄方面海軍作戦』株式会社 朝雲新聞社
- 1968 『戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦』株式会社 朝雲新聞社
- 防衛庁防衛研修所戦史部
- 1970 『戦史叢書 沖縄・臺灣・硫黄島方面 陸軍航空作戦』株式会社 朝雲新聞社
- 宮古郷土史研究会編
- 1995 『宮古の戦争と平和を歩く』麻姑山書房
- 宮古島市教育委員会編
- 2017 『宮古島市文化財調査報告書第11集 荷川取崎名原の古墓 荷川取海岸秘匿壕群・ウブドゥマーリヤ特攻艇秘匿壕群－大米建設新工社建設工事に伴う発掘調査報告書－』宮古島市教育委員会
- 2018 『宮古島市文化財調査報告書第16集 宮古島市内戦争遺跡分布調査報告書(1)－城辺地区・上野地区－』宮古島市教育委員会
- 2019 『宮古島市文化財調査報告書第23集 宮古島市内戦争遺跡分布調査報告書(2)－下地地区・伊良部地区－』宮古島市教育委員会
- 宮古島市史編さん委員会編
- 2012 『宮古島市史 第1巻 通史編 みやこの歴史』宮古島市教育委員会
- 吉田 裕、森 武麿、伊香 俊哉、高岡 裕之編
- 2015 『アジア・太平洋戦争辞典』株式会社 吉川弘文館
- 陸軍船舶特幹一期生会①の戦史(改訂・増補版)編集部(編集主幹 中溝 二郎)
- 2007 『①の戦史(改訂・増補版)－陸軍水上特攻・船舶特幹の記録－』陸軍船舶特幹部一期生会